

シーアクセネイロ

>> MACROSS FRONTIER
>> FOR ADULT ONLY♥







おさるさんパニックのきくのです。
うおー！！！！！20話で号泣しました。
おかげで原稿に手が出せなかった。
そんなわけで薄い本になりましたが…
ミハクラ大好き本ですよ。
少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

ゲスト・Pekoさんからミハクラ小説を
いただきました！！Pekoさんのお話で
ラブラブ度アップ。ありがとうございます！！

気合い入れたページとそうでない(笑)
ページがありますが…えーとですね、
察して下さい…キラッ★











こらあうッ
調子にのるなよ
おいミシェル!!

ちょつと
ミジロ…

そ…そ
ダメッ
激しいやな
うつなの

あふ

あふ

あふ

あふ



>>>補足。蛇足？

お姉さんと住んでいた部屋なんですが、これは勝手に考えたのでございます。今はSMSで暮らしているのだろうと思いますがその前はお姉さんと暮らしていただろう…そしてまだその部屋は昔のままで、それを口実にしてクランを連れ込んだのです。そんな妄想をしてゴメンなさい。
そしてクランのメイド服はC.Cさくらの中でさくらちゃんが着てたメイド服を参考に。
エロ少なくてゴメンなさい～泣。

きっと、戦国BASARA2を大川さん目当てゲームをしなければ、いつきちゃんラブにならなかつた。

で、マクロスFにも大川さん目当て見てたら、クランたんにメロメロになったヨ！
幼女つながりなので、こんなコラボ絵。
自分…満☆足☆

フコト イ☆ジーリンカー

Peko

『彼の立派で、立派な男の子だ』ハルの顔がある、クラウス

も見えた。

「だけど、世間知りませんか？」

だがそれでも、壁の上部。ハルちゃんのおおきいへの顔をハシヤウス

撫でた。

「……せかもの」

その小さな胸元を、クラウスはまだクラウスに迷ひ、一緒に飲み込んだ。

本田はこの次の夜、また飲み会がお開幕。『娘々』でやれやれした。束の間の休息に、氣の知れた仲間同士の飲み会とあれば、会話も食も酒もある。

わたくし、クラウス大爺の腰の中にして、みなみとクラウスが、また腰をくじりと一瞬に飲み干す。おかわりを腰の跡間に何度も注がせられた。

「子供が酒飲むな」

ハリスは突然、背後から現れたのはハル・クラウスだった。クラウスのクラウスを後ろから取り上げ、彼女の腰を高く位置に擱げてしまつ。

「子供じゃない、返せ、ハル！」

確かに見た田はお子様でも、実際は成人しているので、飲酒は法的では何の問題ない。だが、それを知っていても、周りがハラハラするほどの今日のクラウスの飲みっぷり」ハリスは、ショルがストッパーに駆け出されたわけだった。だから、それは逆効果だったみたいである。

「かえせっ！」

テーブルの上に腰をあげ、無理やりハリスを奪い取ったクラウスは、まるで風呂上がりの牛乳みたいに腰に手をあてて、クラウスの中身をぱらぱらと飲みきった。

「ふん！」

「……クラウス大爺におまかしてたうのストレスがたまつて、ハリス様が、お、たまにはハメ外すのやうのかわな」

「ハル？」

ハリスの腰がハリスの立ってたのがやいび、血筋の跳び歩くことなどできれいもない。それに、それ以上あれこれ問題を繰り返す氣力もなく、クラウスは素直にハリスの前に腰をまわした。

「もういい、わやくとつかまつてだ」

それを確認したハリスは、クラウスの腰の上に手をまわして立つ上がった。

「……お、おまかせだよか？」

「せせり、何の冗談だそれ。たかがお子様ひとり、重にも何もなにがいい。」

「うふ～～」

クラウンがミシールの髪型を思ふほどの張り、酔っ払つてこんなセリカ力の加減がまったくやめられないが、ミシールはたまつたものではない。「いてえーー！ それはやめり、クラウンー！」

「なり黙つて歩け、私は寝る！」

ミシールの背中に顔を押しこむクラウンはもう少し田舎風じた。

「…………」

じつとじつとミシールの顔が近づいてしまった。穏やかで規則正しい鼓動も感じられないが、どうだ。

(いんない近い)ミシールを懸念してか、感情が止まつてしまつてもわからぬ...) 酒のせにドバドバと回る頭の中、なんう事ない想いを抱え、クラウンは瞳を閉じたままひくつかひくつかしてしまった。

☆ ☆ ☆

部屋にいたり着くと、ミシールは背中におさつたクラウンをゆづりとベッドにねりして横たわる。本物の女の背中で寝てしまつたクラウンだったが、もう一度やつて耳を覚ます。ただ、まだ完全には覚醒していないらしい、瞼を瞑じたまま目隠しを差し入れてぐごごとそれを下に引つ張つてこね。

「ん~~~~~、あつづ~~~~~」

酒を飲んでいたので体温が高さのだけれど、確かにミシールの背中はクラウンを下ろした今でも熱を帯びていて、じゅうぶん温つてこた。
「あつづ~~~~~、ねづ~~~~~」

「わかったわかった」

また寝始めた様子で眼を瞑るクラウン、仕方なくミシール

は手伝つてやめたんだ」とした。

「えつこの構図になつてしまんだ」「うね...」

女の服を脱がすのはたゞして珍しいことでもないミシールだったが、クラウンの服は特殊すぎて少々手間取つてしまつ。ひとあくまでジャケットを脱がし、見つけたフタスナーに手をかけてそれを脱ぎしてみる。

「…あ」

あくびことも簡単なアキレスヒールの股せんのまま床にあぐら脱げてしまつた。しかも外想外だったことに、クラウンはショーツ一枚じつぱぱ裸に近づくなつてしまつた。ブリジャーなどは付いていないので可憐なところをいつのまにか見つめただつても

「…あ、必要ならからぬだつ船か」

だが、女の裸はいつもよりの感觸があつた。だが、女は裸ではないとした。迷いのよつとした好奇心でそれを手に包み込んでみる。あるいは意外にやわらかくて柔らかい感触が手に残り、思った以上に質量はあるのだよ。ミシールは感心して今度はそれを強く手に包み込んでみた。
「…あ、みしゃべる なってや〜〜〜」

(やせの...) 張つ手でやさしくしてみると、ミシールだったが、それまでつめども解てしなかつた。不思議に思つてクラウンの顔を見ねる、いかいをじつと睨つねつねと見つけたが、なぜか瞳にさりかゝる、ミシールはむきつとした。

「胸...あひつちがこだわる...」

「…せ〜」

「わづかひやくしかつからなか〜」 思ふ女の胸をやまないこねが足で擦つてからかうかな」と聞こつてから、クラウンはやせやせの酔つてこねのだけれど、あまりわかっていないミシールは眞面目な顔で立脚した。

「やつたまな、もう一度やくねづかひやくかこ

「あつだいわ。」//シールの妹みせ足ひでこ。アヌルは苦笑だ。「…」「…アヌルがなこ。わいのやこなりやべと笑ひな。わいがひになてもクリンは女なんだな」

「へー。」

「//シールの手がうへいおを回さんでもあるひへし動かす。うへいとクリンは震えた。アの反応をからかうかのムードアリ。」//シールは手の中の淡いらべいみをやめていた。わぬいの手の手を固くやるかくびゆみのしなり、それか手じくみ込だされたの先端たゞ吸いつて。」//シールははっとした。

「あやか感じてこむのか。」

「はかっ…」//シールが触るかういたへい

「わぬいおねじ瞳を潤ませたかう四分を覗みつけて。」//シールは思案顔になつた。

「……」

アソトナのめめ止付かれてアソトカノ移動れか。クリンのシーチの中止感わしおかだ。

「…ない、だねだ…」//シール

燒ててクリンが回転をやめうつせじ。だがアヌルが先だ//シールの指先せざるの中止した。の着せ。軽く満てられて動かすことに。」

「あ…んっー。」

「この体でもやめやどん感じなだは」

僅かながら想だしてたに蜜が指し縒みつてのを確認。」//シールはやいひし蜜を呼ぶより指を動かした。

「//シール //シール。」

あぬいおながクリンが何度も口を喰へる。」

「あんな顔で叫ぶな…」

「へー。」

「//シール」口を塞がれてクリンが静かになる。

アソトカナリカノの脚せ繋へせひ黙のかく。」//シールの怒鳴れひが。壊った。かくならぬ奥への極へて叫びた。アのうながせかうの取だせ。わかわからな様子。おもろかひだに見えていたから。余計に抑えがきかなくなつてしまへ。

「//シールは奥のまへ體やかく。アの脚をひだか。クリンの口因を遠慮なんぞした。

「あ、らせり…」
長じてひだかを終えて脚が離れる。熱い吐息をつきながらクリンは//シールをもつねばせじ。」

「//シール…おへんめうつしののか…」

「ねあえもな…」
//シールは歎息しおかつた。
「ねたしあ…ねたしあ…」

アソトクリンは先せざるの微撓と濃厚なキスのおかげで少し熱を持つてこの場所を意識し。やんわりと蜜をあらぬけた。

「怖こなれやめいやめ」
怖くなれぬは。おもぐが離れぬは…」
おもぐ然然離れた。の状況。心懲つた。アのうながし体の慄れを満たしてやねのぜ。クリンはもう。」//シールはたかだかのたかだかの怖くなれなかつた。抱く理由も何もなし。唯一不安がある。アヌル。アヌルの本意がわからなこじだはだつた。

☆ ☆ ☆

「ふたじつ、いたい〜〜」

「はかっ。もっと力抜け、じゃないと痛だつて」

「〜〜〜〜」

「べ〜…」



中継半導」「痛みを止められぬまま」//シトルは黙て呑のく//クリンの身体を一瞬に貫つた。その瞬間、心中に感じた鋭い痛みがクリンの痛みを物語つてやめたが、同時に抱えていた彼女の顔を覗き見む。「大丈夫か?」

「//シル…」

痛みを遮る着かせよといふ懸念し息を吐へクリンの瞳には涙がこぼりだまつてこだ。

「悪い…。だが、仕方ないだら。クリンが俺のこなつばかりをあらぬんだからだ。…とにかく、入った」と四体が奇跡だ」

「…そんなあけすけな言ふ方やあらか…ト品だわ」
だがそんな//シトルの言葉にうつ笑みを浮かせたクリンは、強張つていた体が少し緩むのを自分でも感じてこだ。外想以上の痛みだったが、この行為で//クリンの時は痛み以外で止まらなかった//クリンはすでに体で感じてこだのだから我慢できた。

なんの色気もなつたうつ体にて御に愛撫を繰り返しつれた//シトルのおかげで、心地よい快楽をクリンはめでて居わつてこだ。こんな体で//シトルを吸込入れるために腰を震ふ、事前に握りかねと運転することができるだけでもう諦めかねようやくが勝つた。

痛みを伴つ//クリンは変わりなし。クリンは//シトルの体にかかると抱きついた。

「もう大丈夫やつだな」

クリンが抱かれての息を詰めて待つてこだ//シトルはその体の固むが抜けぬのを直に感じてこだ。わからじのままだとあまの中のわつわつ暴発しかねなし。

「わつわつ我慢しろよ」

腰を揺らぬかすと、クリンが一瞬だけ顔をしかめる。だが、かまわずゆづれじ上トに動きたせば、最初は抱ひ合つた時の表情が次第に別のものこなれつてしまだ。

「…つ…あつ…こ…」

少しだけ冷たい//シトルはまではかくも餘分な力になつた。動きも頭から樂になつてしまだ氣もすい。激しくせじめなこが少しは緩急をつかた動きがでれるよになれば//クリンは//シトルの意図への反応を返して//。

「//…ここみたてだな…。あたの//…」

「…あ…やあ…//…たぬけ」

びびりと震えぬクリンの体に拘束つこし余計に縮じまつてしまつてこだ。その腰を揺さぶが//クリンの吐息も少し荒じる。

「…、めった//…//…めでたわゆは思わなかつたよ」

「//シトル…つ…あそ…」

「…そり」

わちうとクリンが身なま縁ぬかれて//。その縁ぬ身は//の女の出でせぬ//シトルは思えなかつた//。

「…」なぜ、//シトルはつたは

「談じゆつかあらうめこし//クリンの縁て腰を抱かれた//シトルはわい一處の中で隠して口を含む。

「やあり…//シトルのこなせこせい…つ…あつ…」

せりせりせりせれぬ涙は快楽のせつなのだしづの言葉で知れず、めずおも高めぬせかづけ//シトルは夢中で而こしては跡つ作業を繰り返した。

「あつ…あう…//シトル…//シトル…わつ…つ…あら…」

「…」

耳の意識が同時に一瞬だけ口//溢ぐた。

腕の中でかくと震えぬクリンの中に精を放つたのだと//シトルがはつきりと認識したのは、そのあまりの心地よい解放感から若干冷めた顔になつた。クリンはぐつたましき身を預けたまま氣を失っていた。わからじ負担がかかるつたのだと//。

(…ルのおお朝まで起つてはまづこ)

クソの瞳の汚いからひどい顔のせい//シルは口ひき。そして、ひびきの無い想ひ十の後悔を胸の奥に//シルは泣く。部屋をあわてて入った。

☆ ☆ ☆

「う…う…へんなかんじがする…」

翌朝、まだ痛みの残る体を無理やり起き//シルは基地内を移動して、一步足を動かすだけで妙な痛みが疼いて歩けない。そんな様子に仲間たちが心配をした。

「どうしたんですか?」

「…一口酔つた」

と知らぬしかなかった。本物の理由などないと思はもなし。そして、そんな間違ひを回りから繰り返した頃//シルはまたまた泣きだす。

「…………」

その顔を見た途端、一瞬でもかしこもれまい//だが逃げた手にも素早い動きがで始めた。顔を真っ赤にしてシルはもう泣くしかなかった。

そんなクリンの様子//シルはうつと笑みを浮かべた。

「一日酔つた」

「はっ、おかしい。おおえ、わかつて聞いていたなー。」

「…やうだよな。忘れていたのはおかなよな」

「//シル?」

またからかわれたのだと思つた。しかしこいつは國威の邊//シルは、彼のクソは不承じない。

「やせつ晩のルルセー一夜の過かじていたのか?」

「…クソ」

クソは一番不承に思つていた//シルは口ひき。

「でも私は後悔してなこからな。せせじぬせ//シルはかここと…あつと思つてこたかり…」

やじやじと傭きたがりクソは素直に自分の感情をねがひ語る。

「おおえはなあ…やうこう」とは簡単な口ひきのせんやな」

「なんやたら、私の素直な気持ちだ」

今度は顔をあげてしまつて見つめ返し//シルは瞳を閉じ、シルはむづ軽い言葉を返せば。

「ルルセーがお前の怖いところだ…」

「えいこうだ…」

「おおえ、次の非番いつだ」

「ふふ~」

話の流れが見えて、クソはやよとと顔をかぶつた。

「お前に行きたことない、つてもあつてもね。が、初めての相手だけでも満足してこられたのなり話せ語だけじね…」

「ほ、つまつまれはトートの誘つてついたのか…?」

「他の回で聞いたつて聞ひました。…」それでからお子様な

「//シル~~~!」

飛ひ込むように抱きつこうとしたが、シルは胸を抱きしぬ//シルは覚悟したかのように口ひきがじ誰にか見せられたのなら甘い笑みを浮かべた。



・シアワセネイロ

2008/09/28

おさるさんパニック

<http://www.h2.dion.ne.jp/~sarusaru/>

※無断転載・オークション等禁止※



> OSARUSAN PANIC
> PRESENTED BY : KIKUNO
» KLAN KLANG LOVE!!